

## スペンサーと庭

——「アドーニスの園」と「至福の園」における自然の庭と整形の庭——

小田原 謠子

絵画に表わされた庭をごく大まかに見ると、最初の庭は『聖書』におけるエデンの園であろう。ここには、想像出来るかぎりの木、花、果実、野菜が育ち、アダムとイブが動物たちと平和に暮している。そしてギリシア神話における神々の庭がある。天へ通ずる山々に囲まれた、開かれた風景、いわば「開かれた庭」である。そして人間界における中世の庭は、小さなゴシック様式の噴水、カーネーションなどを植えた壺、刈り込まれた芝生、迷路などのある、囲まれた「閉じられた庭」である。そして16世紀に入って、楽しみのための庭が登場する。<sup>(1)</sup>

スペンサーの『妖精の女王』には、対になるいくつかの場があり、正なる場とそれに対する負の場として設定されているが、庭が対になっているものがある。すなわち、第三巻における寓意の核「アドーニスの園」を正なる場とし、第二巻における「至福の園」を負の場とする一対である。この二つの園、二つの庭は、比較によってそれぞれの持つ意味がいっそう明らかになるものであるが、この庭は、先に述べた絵画に表わされた庭と合致するものでもある。いや合致するのはむしろあたりまえのことであり、絵画に表わされた庭は、芸術家の想像力の産物とはいえ、エデンの園、ギリシア神話の神々の庭は別として、当然のことながら、ある程度、現実の庭を反映するものと考えられる。「アドーニスの園」と「至福の園」を眺め、それらと現実の庭との関わり方を見よう。

### 「アドーニスの園」

「アドーニスの園」はヴィーナスの地上での住居であり、ストーリー展開上ではヴィーナスの養女となるアモレットの養育の場である。アモレット誕生の経緯はこうである。ある夏の日の午後、妖精の一族であるクリソゴニーは、水浴の後、草むらに身を横たえて眠っている間に、太陽の光によって身籠り、目覚めて、身におぼえはないものの身籠ったことを恥じて身を隠し、9ヶ月森の中をさまよった後、疲れて眠ったまま双子の姉妹を出産する。彼女は「喜びなく身籠り、苦痛なく生んだ (III vi 27)」のである。そこへ、いなくなった息子キューピッドを探すヴィーナスがダイアナと共にやってきて、眠っている母親と二人の赤子を見つけ、各々が一人ずつ赤子を連れ帰り、養女として育てる。赤子は、それぞれの養い親の特質を受け継ぎ、ベルフィービーと名づけられたダイアナの養女は処女性を、アモレットと名づけられたヴィーナスの養女は女らしさを完成させるべく育てられる。ヴィーナスはアモレットを彼女の地上での住まい、彼女の恋人の名にちなんで名づけられた楽園「アドーニス

の園」へ連れてきて、キューピッドの妻サイキに養育を託す。(III vi 2～52) ここは「自然」が造り出し得るかぎりの美しい場所であり、「他のあらゆる楽園をしのぐ喜びの楽園 (III vi 29)」、豊穡の園なのである。

おもしろいことにスペンサーが豊穡の園としているこの園は、「はかない一時の美しさとすみやかな荒廃」<sup>(2)</sup>の象徴とされていたアドーニス祭祀における「アドーニスの園」と同じ名称を持つものだ。アドーニス祭祀の遠い記憶との関わりについては、すでに他で述べたので<sup>(3)</sup>、ここでは遠い記憶のあることを指摘するにとどめ、「アドーニスの園」が、自然のサイクルの中にある自然の恵み豊かな園と設定されていることに注目したい。

「アドーニスの園」には、「自然」がわが身を飾り、恋人の花環を作るためのあらゆる花があり、その性質に応じて、生まれ、死んでいくあらゆるものの最初の苗床がある。古くからの肥沃な土壌にあって、鉄の壁と黄金の壁に囲まれ、新しく美しい門と古くひからびた門の二つの門を、二つの性格を持つゲニウスが番をしている。ゲニウスはこの世に生まれ出たいと願う者たちを送り出す役目をしており、昼も夜も、何千もの赤ん坊が彼にまつわりつき、「肉の衣 (III vi 32)」を着せてくれとせがんでいる。運命の定めたとおりに、彼が「罪深い衣 (III vi 32)」を着せて、やがては死すべき境遇へと彼らを送り出すと、彼らはやがて裏の門から戻ってくる。戻って来た彼らは再び園に植えられ、あたかも「肉の墮落 (III vi 33)」や「死すべきものの痛み (III vi 33)」など経験したことがないかのように、そこで新たに育ち、何千年かそこにとどまった後、ゲニウスの手で他の姿を与えられ、ふたたび「うつろいやすいこの世 (III vi 33)」に送り出されるが、また戻ってくる。このように、古いものから新しいものへと車輪のようにぐるぐると回るのである。そこは庭師の要らない庭である。というのは、「産めよ、ふえよ」という神の言葉をおぼえているために、植物は自から生育し、永遠の水分を内に含んでいるために、水さえ必要としない。あらゆる形の生きものが、日毎世界に送り出されるが、巨大な混沌から補充されるため、少しも減らない。この園の最大の敵は「時」であり、「時」さえいなければ永遠の幸福があったことであろう。ここにはあらゆる生きものの、恨みや嫉妬を知らない愛の成就の姿があり、花は咲き、木々は実る、不断の春と不断の収穫の時が同時に存在する。この園の中央にそびえる山の頂上にミルテの繁みがあり、樹脂の甘い香を辺りに放っている。その最奥に、人工によるものではなく、木々が本来持っている性向によって枝が編みあわされて自然に出来た、気持ちのよいあずまやがある。ヒヤシンス、水仙、アマランスがあたりに咲き乱れているそのあずまやは、ヴィーナスとアドーニスのためのものなのだ。(III vi 30～49)<sup>(4)</sup>

これはエデンの園を模したものであろう。あらゆる種類の木、花、果実、野菜、動物たちと人間がいて、平和に暮らしている。エデンの園においては生命の木と善悪を知る木のある中央部に、この「アドーニスの園」においてはヴィーナスの木であるミルテの茂みがあり、これがヴィーナスの園であってエデンの園ではないことを示しているが、これは楽園そのものだ。ただこれは地上の楽園であり、「地上の」というところに大きな意味がある。あくまでも「地上」のものにとどまるところに、「永遠」の相を呈示するエデンの園との大きな違いがある。つまりこの園から受けるイメージは豊穡ではあるが、それは「永遠」の豊穡ではなく「時」の支配を逃れられない、あくまで「自然」のサイクルの中

にある豊穡なのであり、その豊穡の園、生と死の交代の場所と設定された園が、当時よく知られていたピタゴラス、プラトンなどの輪廻、転生の観念を織り込んで述べられているのである。

### 「至福の園」

対する「至福の園」は、第二巻の主人公「節制」の騎士サー・ガイアの打ち滅ぼすべき大敵、妖女アクレイジアの住む園である。この園へ至るまでのガイアの航海は、『オデュッセイアー』、アルゴ船物語に枠組みを借りており、「至福の園」は『オデュッセイアー』に登場するキルケーの館を連想させ、またその描写には、タッソーの『解放されたエルサレム』から借りている部分もある。

この園は、「自然」の仕事を「人工」が「真似られるだけ真似 (II xii 42)」て造ったものの中から最良のものを選び出した、甘く、やさしく、感覚に快いものがふんだんにある園である。獣を入れないように周囲は「囲まれて (II xii 43)」いたが、塀は薄く、弱く、門は、戦いに備えるためというより、むしろ「楽しむのため (II xii 43)」のもので、貴重な象牙製であり、イアーゾーンとメディアの物語が刻まれ、血のような朱がほどこされていた。ポーチには、地面まで届く長さの、すそが足もとにしどけなくまつわりつく、ゆったりした衣服をまとい、旅人を誘うような、自然以上に人を喜ばせるような表情をした、長身の、顔立ちのよいゲニウスと呼ばれる人物がいる。彼は生命を司る存在ではなく、その逆の、生命の敵であり、人をひそかに墮落させる存在であったが、彼がこの園を管理し、快樂の番人とされていたのである。もったいをつけるため、杖を手にしていて。さまざまな花で品よく飾られ、傍らには、彼に供えられたものででもあるかのように、葡萄酒の大杯が置かれていて、それを彼は新来者に差し出すのであった。この番人のところから中に入ると、広々とした平面の四方に、装飾的に設計された庭の飾りが散在していた。美しい芝生が広がり、フローラの母の「人工」が、けちな「自然」を半ば軽蔑して花嫁を飾りたてるように、フローラの誉れのあらゆる飾りで——つまり花で——やたら気前よく飾りたてていたのである。

嵐もなく霜が降りることもなく、暑くもなく寒くもなく、おだやかな風が吹きわたり、エデンの園そのものよりも、ギリシア神話の神々の舞台であるテッサリアのテンペ、イーダ、パルナッソスよりも美しく快い。門に似て門ではない、大きく広がった枝と枝とをからみあわせて美しく飾りつけられた門らしきポーチは、巧みな枝で葡萄の蔓をからみあわせて造ったもので、頭上にアーチを描き、色とりどりの葡萄の房がたれ下り、道行く人を誘っていた。その房のあるものは、他をひきたてるために、人工的につややかな金色に色付けされて、葉の間に隠れていた。アーチの下には、顔立ちのよい「過剰」という名の女性が、美しくはあるが女らしいとは言えない、だらしなく乱れた衣服に身を包み、左手に持った金の杯に、右手で葡萄の熟した実の汁をしぼっては、道行く人にすすめていた。それは「最も優美な地上の楽園 (II xii 58)」に見えた。ありとあらゆる楽しみがふんだんにあり、だれも他人の幸せを妬まない。「彩色された花 (II xii 58)」、木かげの谷、そびえる木々、ふるえる茂み、傍を流れる水晶のような流れ、そのすべては「人工」の手になるものであったが、それを造った「人工」の姿はどこにもなかった。天然のままの部分と洗練された部分とが巧みに混じりあっていたので、人は、「自然」は気まぐれのゆえに「人工」を真似し、「人工」が「自然」に不満を持ち、お互いがお

互いをしのごうと競いあい、それぞれがそれぞれの仕事をより美しくしたのだと考えたことだろう。中央に噴水があった。きわめて貴重な混じり気のない材質のもので、輝いており、すべての水路を通る銀の流れが見える。噴水には、変わった像や、気まぐれな玩具を持って辺りをとびはねたり、水につかって楽しげにたわむれたりしている裸の少年の姿が一面に施されていた。その上に、純金の蔦が、蔦本来の色で広がり、蔦は下には降りて、銀の流れに自らを浸し、絶えずこの噴水から流れ出る水は、たまって小さな湖ほどにもなり、底に敷きつめてある輝く碧玉が、波の間に間に見通せたのである。そのまわりには、日差しをさえぎるように植えてある月桂樹が木かげをつくり、水にもぐったり水上に出たり、水とたわむれていた裸の乙女が二人、さまざまな姿で誘惑しようとするのをやりすごして、さらに進むと、その奥まったところにアクレイジアの住まいがあり、バラのベッドに、眠る若者を傍に、彼女は横たわっているのだった。(II xii42~79)

「至福の園」が、きわめて美しいものでありながら本物ではなく健全でもないことは、この園が「エデンの園を越えるほど美しい (II xii 52)」ことや、比較すれば「自然」をケチと言えるほど、そこにあるものすべてが「人工」によって「自然」以上に美しく飾りたてられたものであることが繰り返し述べられていることや、個々の人物、たとえばゲニウスや「過剰」の持つ、どこことなく退廃的で、過度に官能的なイメージに暗示されている。そのことは「アドーニスの園」の自然の実り豊かな美しさと「至福の園」の人工性とを比較することでも明らかになるだろう。「アドーニスの園」は、「閉じられた庭」ではあるが、何よりも自然の実り豊かな土壌にある園であり、そこではすべてのものが、それ自体で成長する。「至福の園」では、自然のものが「人工」によって手を加えられ、形を変えられているのだ。そして、おもしろいことは、よきものとしての「アドーニスの園」がエデンの園につながるものであるのに対し、悪しき者の住まいである「至福の園」が、人の手の加わったフォーマル・ガーデン、整形園と結びつけられていることだ。というのは、これまで見てきた「至福の園」のさまざまなものは、整形園の造園術に見られるものだからである。しかし、整形園、いわば装飾をほどこされた「閉じられた庭」とは、いったいどういうものなのか、それを明らかにするために、イングランドにおける庭園史の流れに目を向けることにしよう。

### 庭園史の流れ

庭園史の流れ、すなわち「庭園の様式が連続的に変化していった過程」<sup>⑤</sup>は、アンヌ・スコット・ジェイムズの『庭のたのしみ：西洋の庭 2000 年』と題された一冊に詳しくわかりやすい。庭の変化は決して唐突に起きるものではなく、早い時期の庭にはある様式の種子が認められ、その様式が絶頂期を過ぎたはるか後に実を結ぶというのが著者の主張である。ここで、イングランドにおける庭の様式の変化を、ローマ時代のブリタニアから、これぞイングランドの庭と言われる 18 世紀の風景式庭園に至るまで、たどってみよう。

イングランドにおける庭の起源は、ローマ時代のブリタニアにさかのぼる。ローマ人が、ローマ風的生活様式とイタリア式の庭園をブリタニアに持ち込んだのである。一番よく知られている当時のイ

タリアの庭園は小プリニウスのトスカーナ荘であったが、これは完全なフォーマル・ガーデン、整形園だった。フォーマルとは、何らかの形式の備わったものを指す言葉であるが、造園で「フォーマル」と言えば「幾何学的」ということである。<sup>6)</sup> 馬蹄形の庭園は並木道や生け垣で切り分けられて、そぞろ歩きに快適な木蔭の散歩道が造られ、さまざまな植物が枝を刈り込まれ、形を整えられた。整形園の外側には、後世チューダー朝の「野原」の兆しとなる、自然と風景との仲立ちをはかった半自然の庭があった。柱廊やあずまや、オベリスク、噴水、ベンチ、水浴びや宴会の場、円柱や格子垣がいたるところにあった。この、装飾過多、あまりに人為的と思われるローマ風の庭園は、しかし周辺の田園の眺望が得られるように設計されていた。

ローマ軍団の撤退の後、造園史における暗黒の数世紀を経て登場するのは、中世の修道院の庭である。中世における主たる造園家は修道士だったのである。イギリスの修道院の最古の図面、カンタベリーのクライスト・チャーチのものには、回廊をめぐらした中庭が描かれ、病舎近くに内庭として小さな薬草園、外側に果樹園、ぶどう園、養魚池がある。修道院の庭のパターンは、ノルマン朝初期以降、宗教改革期までほとんど変らなかつたと考えられているが、回廊の内側には、常に散策と瞑想のための庭があり、たいていは芝生で中央に井戸や泉があり、周壁沿いには、薬草と野菜の畑があった。また大きな修道院では、古参の修道士たちのための個人用の庭もあった。

中世においては、修道院の庭の他に、世俗の庭もあった。宮殿や城、市中の邸宅、荘園の領主館等には、純然たる楽しみのための庭があった。こうした庭は小さくて素朴なもので、果樹園や花咲く草原につながっていることもあった。総じて、中世の庭は、愛すべきものではあったが、初歩的な域を出なかつたと言えよう。

黒死病の流行、バラ戦争など、国家をおそったさまざまな災禍によって造園は妨げられ、チューダー朝(1485～1603)が順調に歩み始めるに及んで、造園はやっと着実な発展を見る。

チューダー様式の庭は、16世紀の躍進のなかでイギリス全土に広がった。イギリス人は、接客型の家を建て、実用と同時に楽しみのための庭を造った。大陸からルネサンス様式を取り入れ、世紀の後半になると、トルコやインド、メキシコ、アメリカ大陸からわたって来た異国の植物を植えたのである。かっちりした形のチューダー様式の庭は、およそ150年にわたって続いた。それは、塀や生け垣で囲まれた正方形のもので、玄関側やテラスから観賞出来るよう、家の正面に造られ、家と庭とは一つにつながっていた。その正方形の庭では、ふつう真中で二本の道が交差し、その交差部に花壇や噴水が配された。またこれと平行する小道もあった。そしてこの時代に取り入れられ、たちまち花の庭の主流になったものに、結び目花壇があった。これは、煉瓦、ラヴェンダーやローズマリーの低い生垣、あるいは、つげ、さらには矮性の植物、彩色した砂利や砂による文様などで縁取りした花壇のことで、デザインには幾何学模様も、動物のモチーフや紋章もあった。またこの庭のもう一つの特徴は、ローマ兵の撤退以来はじめて再び行われるようになった装飾的な刈り込み(トピアリー)や格子垣のアーチ、そして、チョーサーの時代のように、内部に芝ベンチを配したあずまやであった。

以上の庭は、小規模なマナー・ハウスなどの基本的で控えめな庭のことである。チューダー朝の上流階級はフランボワイヤン様式を好み、中でもヘンリー8世(1509～47在位)はハンプトン・コート

やノンサッチで、自国の人々のみならず外国の大使たちをも驚かせるような造園を行った。彼はウルジーから引き継いだハンプトン・コートを拡張整備し、基本的な形は壁で正方形に囲むものだったが、それをたくさん組み合わせた。王の一番大きな庭、王妃のバラの庭、池の庭、菜園、果樹園等々。王の庭には、あずまや、彫像、築山、噴水、装飾的刈り込み、日時計、結び目花壇、区画された花壇、鳥舎、屋根つき遊廊等、さまざまなものを配した。文献や発掘調査によって知られるところでは、彼がノンサッチに造ったのはさらに途方もないものだった。イギリス人の手によるフランス式とイタリア式の折衷の庭で、宮殿に付随する禁苑には、大理石の円柱、彫塑的な噴水、最新イタリア式の花で飾られた花壇、そのむこうにはいわゆるチューダー朝の「野原」があった。

ヘンリー8世に続くエリザベス朝(1558～1603)の大規模な庭園は、ルネサンスの壮麗といささか稚拙なチューダー朝の混合スタイルだったようであり、それに対する批判もあった。フランシス・ベーコンは「庭について」と題されたエッセイで、彫像や結び目花壇、凝った刈り込みを批判し、簡素の美を称揚している。<sup>(7)</sup>

そしてデザインの急速な進展があった一方で、エリザベス朝の初期は、熱狂的な植物愛好癖の夜明けであったことを忘れてはならない。造園家たちは、野菜や薬草の育成に専念することなく、自分たちの興味をかきたてる美しい花を愛しはじめ、もっと大きく、もっと色あざやかな品種をふやしたいと思い、都市に住む貴族たちは園芸の保護者となり、市中の商人たちは、熱心な蒐集家として、海外にある代理店や自分の持ち船の船長を使って、世界中に新しい植物を探し求めた。ロンドンの庭園のいくつかは大規模で、草花や灌木、野菜だけでなく樹木までも収容出来る広さを擁していた。17世紀にはイングランドでは大変珍しいものだったオレンジ、レモンといったデリケートな植物は、鉢植えにされ冬は囲いの中に入れられた。16世紀半ばからは、異国の植物が続々到着するようになった。その多くはトルコから、あるいはトルコ経由で、またヨーロッパ、新世界から届いた。何より興味をそそるのは、初めてのチューリップで、チューリップ狂いは、後に1630年代のオランダで絶頂に達するが、イングランドではもっとおだやかに広がった。そして新世界から届いたじゃがいもは、食料の世界に革命をもたらした。17世紀後半、庭造りの術は最高潮に達し、造園家たちは、それまでの何世紀分にも匹敵するほどの情熱をもって植物を探し求めた。

ジャコビアン(ジェームス朝 1603～25)時代には、方形という基本の形は残ったものの、いくつかの展開があった。楽しみのための庭づくりがひろまるにつれて、独立した菜園が主園の外に造られるようになり、楽しみ庭と菜園とが別れたことがその一つである。他の変化は、庭が家の表側から裏や脇へ移っていったことである。さらにもう一つの展開は、結び目花壇が次第にパルテールに変わっていったことである。パルテールには、帯飾りや渦巻き文様あるいは唐草模様といった幾何学的デザインを、平らなテラスに、砂や木炭、砕いた煉瓦など、色のついた材料による下地の上につげの刈り込みで幻想的に描いた壮大な「詩集花壇」から、芝生を定まった文様に切りぬき、つげで縁取りした単純な「イギリス風」パルテールまでであった。またジャコビアンの比較的大規模な庭園には、空間の感覚と開かれた眺望へと向かう道を開いたものもあると言えよう。

17世紀のはじめ固く閉じていたイングランドの庭は、「この世紀の末には外に向って開き、館から

地平線へと……庭はその周壁を突破してパーク(林苑)にとけこんだ……。』<sup>⑧</sup> これはフランス庭園の強い影響によるものである。フランス様式はイタリアのルネサンス庭園に起源を持つもので、代表的なフランス様式の庭園設計者は、太陽王ルイ14世のためにヴェルサイユの庭園を設計したル・ノートルである。彼の庭は、宮殿や城館の上階の窓から一望のもとに見渡せるようになっていた。常に館から地平線へと向う一本の主軸が通されており、それはパルテールをぬけ、整形の湖や水路の両側に分れ、ついでまた会して森を貫き、どこまでも延びていく。この主軸のところどころに円や半月が配され、そこからまた細い並木道が四方八方に延びて行き、その間に出来る三角形には、あずまや、噴泉、凱旋門、池、柱、彫像、迷路など、さまざまな道具立てが配されるのである。丘陵の起伏のあるイングランドでは平坦な北フランスのようなわけにはいかなかったが、庭園を愛したチャールズ2世(1660～85在位)は、その追放時代フランスの母のもとで過ごした時に、フランスの造園家のパースペクティブをきかせた構成に参ってしまい、ハンプトン・コートにフランス様式を採用し、富裕な貴族たちもそれにならった。王政復古時代(1660～85)の庭園の原理は、空間、数学、シンメトリーだった。もっとも、庭造りの流れは常に一本に絞られることはなく、従来のスタイルを変えようとしないう人も、変えるのに必要な巨額の金のない人もいたことは言うまでもない。

17世紀後半は、フランス様式に対する不満から、まったく異なる二つの造園様式が支持された。一つはフランス様式を、花をあまり大切にしないと非難する、花造りを愛する植物栽培家の、明らかにチューダー朝のものとおぼしき造園法がなお続いていることを示す様式である。もう一つは、普通18世紀のものとされている不整形で起伏に富む風景式庭園誕生の兆し、たとえば、「内と外」をつなぐものとして、眺望を断ち切らないよう掘割りとして設定された境界、ハーハーである。

ウィリアム3世(1689～1702在位)とメアリ2世(1689～94在位、共治)は、やはりイタリアのルネサンス庭園に起源を持つ、フランス様式の分派であるが、より小さく、より濃密であったオランダ様式の庭を、ハンプトン・コートなどに造り続け、フランスとオランダの影響を受けた整形の様式はアン女王(1702～14在位)の時代もイングランドの庭の主流となっていた。オランダ流の刈り込みは、ポープの、常緑樹狂いに対する風刺に火をつけ、風景式庭園の運動をひきおこし、アン女王の亡くなった1714年は、ちょうどこの変わり目にあたった頃であった。

何世紀にもわたる整形の庭園は、徐々にしかし確実に覆され、18世紀には曲線と自由をよしとする庭の形式が生まれた。シャフツベリー卿、ポープ、バーリントン卿、ヴァンブルーといった人々が、風景派運動の先鋒となり、風景式庭園運動は少なくとも三つの段階を経て開花したのである。第一の段階は過渡期的なもので、旧来の庭をまったく廃するものではなく、整形ではあるがあまり手の込んでいない庭を、曲がりくねって流れる小川、古典的なデザインの橋、森などと結びつけようとした。牛や羊が庭に侵入することなく庭が自然の風景にとけこむよう、庭のまわりにハーハーをめぐらしたこの時期の代表的造園家の一人チャールズ・ブリッジマンは、フランス風のシンメトリーを崩し、自然な茂みと曲線を描く小径を添えた。彼方の丘陵の起伏や田園の広がりをもぞむようになった風景式庭園のあるものには、哲学的主題、たとえば「自由の神リーベルタース」のような原理を祀った神殿を配するものもあった。この運動が展開するにつれて、一切を古典的なもので仕上げる本来の方法に

対し、ゴシックの装飾要素を用いるものも現れ、ゴシック様式の建物や塔が田園風景の中にそびえ、廃墟や枯れた樹木がメランコリックな味わいを添えた。第二の段階は「ケイパビリティ・ブラウン」の登場によるもので、彼は風景式庭園を単純で飾りのないものにした。花園を廃し、館の脇まで芝生にし、先人たちの神殿や彫像などを一切意に介さず、敷地の高低、芝、水、樹木だけを素材とする庭造りを行い、「木の茂みや丘陵、野原、湖、小川が静かに調和する、ひとひらのイングランド風景」<sup>(9)</sup>を造り上げた。彼には植物に対する興味が乏しかったことから、一面の草野原にあきたらない人たちは、次の第三段階の主たる担い手ハンフリー・レプトンの登場を歓迎した。彼は18世紀の風景式庭園とビクトリア朝初期の庭園の架け橋となった人で、館の近くにテラスや花壇、バラ園を復活させ、館の壁に蔦を這わせ、格子垣や温室、並木道を復活させた。「館は庭と一体でなければならず」<sup>(10)</sup>、パーク(林苑)の中にポツンと館があるようではいけないというのが彼の考えだった。ストウ<sup>(11)</sup>、キャッスル・ハワードなど、この様式の庭園の多くは今も残っているが、風景式庭園の展開の、その初期から完成までのさまざまな主題のすべてがストウに見られる。ここではヴァンブルー、ブリッジマン、ケント、ギブス、ケイパビリティ・ブラウン、その一人一人が先人の仕事をあまり損なうことなく、新しいものを付け加えている。

## むすび

庭園史の流れをたどり、「囲まれた庭」から「開かれた庭」まで、自然と整形、装飾とが織りなす造園術の変遷を眺めてきたわけだが、先に見た「至福の園」のさまざまなものは、整形園の造園術に見られるものであることは、今や明らかである。「戦いに備えるためというより、むしろ楽しみのため」に造られた、彫刻の施された象牙の門は、「楽しみのため」の庭づくりの一要素である。門番のゲニウス、また「過剰」なる女人は、庭に置かれた彫像を連想させる。(実際、時代が下がって18世紀になると、彫像を買う費用節約のため、人間の体に色を塗り、彫像の役をさせるということさえあったのだ。)装飾的に設計された広い庭の芝生、枝と枝とを巧みにからみあわせて美しく飾ったアーチ状のポーチは、その下に「過剰」の女人がすっぽり入っているあたり、装飾的刈り込み(トピアリー)と、刈り込んだ空間に置かれた彫像を思わせる。また、中央にある噴水は、整形園において大事な一要素なのである。そして、アクレイジアが身を横たえているバラのベッドは、その昔、整形園を造ったローマ人が、宴会用に、おそらく香という実用のために、バラの花びらを大量に使ってマットレスを造ったことを思いおこさせるものである。

スペンサーの庭は、花の庭でもあった。「アドーニスの園」は、樹木だけでなく花壇が場を与えられている庭である。もっとも、あらゆる花があるとは言いながら、実際にあげられている花の名は多くない。当時、今ほど多くの花があったわけではないのだ。あずまやあたりに咲き乱れているものとして、ヒヤシンス、水仙、アマランスの名があがっているだけである。しかし、このヒヤシンス、水仙は、16世紀半ば、トルコから、あるいはトルコ経由でイングランドにもたらされたものなのだ。また、中央にあるミルテの木も、南国産のまだ珍しい木であった。当時の貴族が、オレンジ、レモンなどと共にパリに注文した木である。<sup>(12)</sup> 花の名、木の名、楽園の名を数えあげる、いわゆるカタログの伝統



と見られるが、これは単なる羅列ではなく、珍しいものの名をあげて、珍しいもの、新奇なものに対する感動を表わしているのだろう。植物愛好の夜明けであったエリザベス朝の、珍しい植物に対する愛好熱を反映していることが見えて面白い。

エリザベス朝(1558～1603)の大規模な庭園は、おそらくはルネサンスの壮麗と、いささか稚拙なチューダー朝スタイルとの奇妙なごた混ぜスタイルだったのであり、当時、それを批判した者もいた。たとえばフランシス・ベーコンが「庭について」と題された——1625年刊であるが、おそらくそれよりずっと前に書かれたものと思われる——エッセイの中で、彫像や結び目花壇、凝った刈り込みを批判し、おおむね簡素の美を賞揚していることはすでに述べた。とはいうものの、彼自身の理想の庭は簡素からはほど遠く、庭の生け垣に、鳥籠用のスペースとしてやぐら状の刈り込みをするほどで<sup>(13)</sup>、技巧的なものに不満を述べながら、その実、自分はあらゆる技巧を楽しんでいたと言っているだろう。また、後に、フランスとオランダの影響を受けた整形庭園の刈り込みなど、整形の行きすぎを批判して自然と非対称の美を賞賛してやまなかったポープも、自らの行うところは、彼の言葉よりもはるかに保守的で、彼の庭はまったくの整形とっていいものであった<sup>(14)</sup>という。

スペンサーもアイルランドの自然を美しいと述べ、技巧、人工を批判しているところがある。彼もまた整形園の批判家であるようだが、スペンサー自身の庭はどうだったのだろうか。整形園の批判家でありながら、自分の庭は整形園であった多くの批評家と同様であったかどうか、それはわからない。デズモンド伯の反乱後、下げ渡されて1586年から1598年まで彼が住まいとしていた、もとデズモンド伯の居城の一つであったキルコルマン城は、彼の晩年暴徒に焼かれ、その残骸は、筆者が数年前訪れたところ、野鳥の保護区に指定されている区域の中に、今も灌木におおわれて残っているが、当時どのようなようであったか詳しいことはわからない。<sup>(15)</sup> 確かなことは、彼が整形園を悪しきものと結びつけた形で詩に表わしているということだ。

ところで面白いことがある。スペンサーを気に入らず、彼がアイルランドにやられることになり、またロンドン帰参のかなわなかった元凶と目されているバーリー卿の名が庭園史に登場するのである。先に庭園史をたどった時、16世紀も深まると「少数の大貴族たちが、イタリア式に彫像や壺、かめなどを据えた庭を競って造るようになった」ことを述べたが、バーリー卿は、その筆頭だったのである。「このような庭の栄光は、彫刻のほどこされた噴水にあるとっていい。そこから流れ出る水は沐浴や船遊びのための池に注いでいた。」彼の庭はまさしくこのような庭で、ハートフォードシャーのシアポールドにある彼の庭では、「灌木の間をぬって船遊びができた」<sup>(16)</sup>という。そして「至福の園」では、彫像を思わせる人物が庭のあちこちに配され、少年の姿の彫刻が一面にほどこされた豪華な噴水から流れる水がたまった小さな湖ほどの池では、二人の乙女が水遊びをしているのである。

自然と技巧ということを考える時、スペンサーの自然観、またエリザベス朝人の自然観を見なくてはならないだろうが、これについては稿を改めて考えることにして、「自然」の手になる庭をよきものとし、技巧の勝った整形の庭を悪しき者の住まいとしたことに、スペンサーの自然観、美意識、彼の庭に対する見解が表わされているだけでなく、彼の個人的感情がはさまれていたとしたらどうだろうか。そうだとすれば、庭を眺める目も、またひとつ違ったものになる。

(注)

- (1) 絵画に表わされた庭については、Bryan Holme 著 *The Enchanted Garden: Images of Delights* (London, Thames and Hudson, 1982) 参照。
- (2) J. E. ハリソン、『古代芸術と祭式』(1913)、佐々木理訳、東京、筑摩書房、1973年、p. 44。
- (3) 「The Garden of Adonis に関する一考察——Adonis 祭祀の遠い記憶とのかかわりについて」(『中京大学教養論叢』第18巻第4号、1978年) 参照。
- (4) この「アドーニスの園」の源泉の一つとして、筆者はまだ目を通していないが、『ケーベスの書』なる書物があるとされている。
- (5) アンヌ・スコット・ジェイムズ、『庭のたのしみ：西洋の庭2000年』、東京、鹿島出版会、1984年、p. 8。庭園史の流れを概観するにあたり、筆者は主としてスコット・ジェイムズの『庭のたのしみ』に拠っているが、古代エジプトから近代ヨーロッパ、アジア各国にまで及ぶ造園史の研究書、岡崎文彬著『造園の歴史』I～III(京都、同朋舎、1981年)をもあわせて参照されたい。また Claudia Lazzaro, *The Italian Renaissance Garden* (New Haven and London, Yale U. P., 1990), Roy Strong, *The Renaissance Garden in England* (London, Thames and Hudson, 1979) も有益である。
- (6) 『前掲書』、p. 8。
- (7) 『前掲書』。p. 38。
- (8) 『前掲書』、p. 58。
- (9) 『前掲書』、p. 88。
- (10) 『前掲書』、p. 89。
- (11) John Martin Robinson, *Temples of Delight: Stowe Landscape Gardens* (London, The National Trust · George Philip, 1990) 参照。
- (12) アンヌ・スコット・ジェイムズ、『前掲書』、p. 48。
- (13) 『前掲書』、p. 38。
- (14) 『前掲書』、p. 79。
- (15) 川崎寿彦著『庭のイングランド：風景の記号学と英国近代史』(名古屋大学出版会、1983年) 22ページにも、スペンサーが「キルコルマンに所有していた城と荘園についても、庭園の記述は見当らない」と述べてある。
- (16) アンヌ・スコット・ジェイムズ、『前掲書』、p. 38。